

繪本佐野教義錄

七編

全

750

243





明治十九年十月十二日 新聞 125





浮田主從越前福井著書目録

- 十六回 浮田主從越前福井著書目録
- 十七回 譽田雅樂助浮田主從對面話
- 十八回 星名彈正罪惡露頭て驚く話
- 十九回 浮田主從四侯へ書を贈る話
- 二十回 長盛藏人浮田主從を召す話
- 二十一回 浮田主從大館を討取り話
- 二十二回 浮田佐野の兩士本國へ飯話

繪本佐野報義録第七編

○四十六回 浮田主從越前福井著書目録
 侍て浮田主從ハ恩地と少時話説を為再會を
 述つ、丈六と共に廢寺を立出山路を歩行は
 丈六ハ本街道を導き袂を分てり主從ハ自是
 而北國街道を出日を経て終つ越前國福井城
 府に着三星屋吉左衛門と云旅舎に止宿成て
 専ら福井藩中の諸士を尋ね合し星名彈正と
 云を目的と而毎日外に出索めり茲に柳橋
 と云る大川に架る橋の詰に歩行懸る時從前
 向扈者十二三個にて轎は為兼武士渡り來り
 往還人を制し通る浮田主從も路旁に差扣へ
 息を轎の左右窓押開きたまは主從二人を視
 るは是ハ奈何年來搜索敵大館七郎右衛門の頭
 ハ惣髪と成共可看紛れ非れハ為十郎も鹿藏
 も小面を視て驚き忽々主從顔を背て不看振
 成て遣過し後打膽めて為十郎ハ鹿藏を嗅き



鳥様汝草津にて粗為聽星名彈正と呼ぶ的社
 人相恰好照合ハ愈大詰疑い不可有今社
 耽星名を看止上ハ必定當藩中ハ有長備
 汝が誠忠貫く処宿志吉兆此上ヤ可有逆勇三
 免ハ鹿藏も雀踊而三星屋立版り主従那角
 相談決め亭主星名が絆を委細聽亭主心
 て稟申様彼人頗る劍術の達人にて三年前
 大守斯波殿の御見出預り祿八百貫頂戴為
 られ當時若殿の御師範職にて威勢肩を比る
 人も無之元未出生ハ四國と聽侍と云を聽て
 鹿藏ハ確と拍手借社俺們尋める人ハ介第郎
 ハ何侍ふぞと問ハ亭主爾々の地侍ふと
 告免ハ為十郎進出出云様然らば星名氏ハ
 愈々尋る人ハ序ハ相尋ね稟申絆有町方支配
 の御憲司ハ何方ハ御役宅侍ふやと問ハ亭主
 益て夫ハ外廓西の見附侍ハ當時御憲司ハ
 速見刑部殿稟侍ると云鹿藏大ハ歓悦て



能社教へ被下侍ふ管ギも御亭主是等の一
 條御他言無用仔細ハ追而知侍る些も御難儀
 ハ懸不可稟申と云亭主ハ不審下ら根穿葉
 穿尋も不成介大聚ハ流石ハ旅舎人の胸中を
 測るも逸く浮田主従ハ稟免ハ御憲司殿ハ出
 給ハ節ハ定て旅宿を御尋問有ハ一通町二丁
 目三星屋吉左衛門方ハ止宿の由を言上仕給
 然ハ上も御疑念有間敷御訴訟止り稟申可
 と云亭主ハ座起退きけるハ憊て浮田主従ハ
 即座ハ願文を相認め介與ハ音川家より賜ハ
 る復難免許状を巻込て早々主従三星屋を立
 出為被教役宅ハ趨行當日懸りの有司の前ハ
 件の願書を差出して白洲ハ低頭して扣へ見
 ハ有司讀畢りて大ハ駭き早速憲司の前ハ持
 行て願書を看せて容子を話レバ速見刑部も
 讀畢りて仰天ハ早速立出て兩個ハ對ハ願の
 一條聞届りハ然一條の裁許ハ有ハ得与

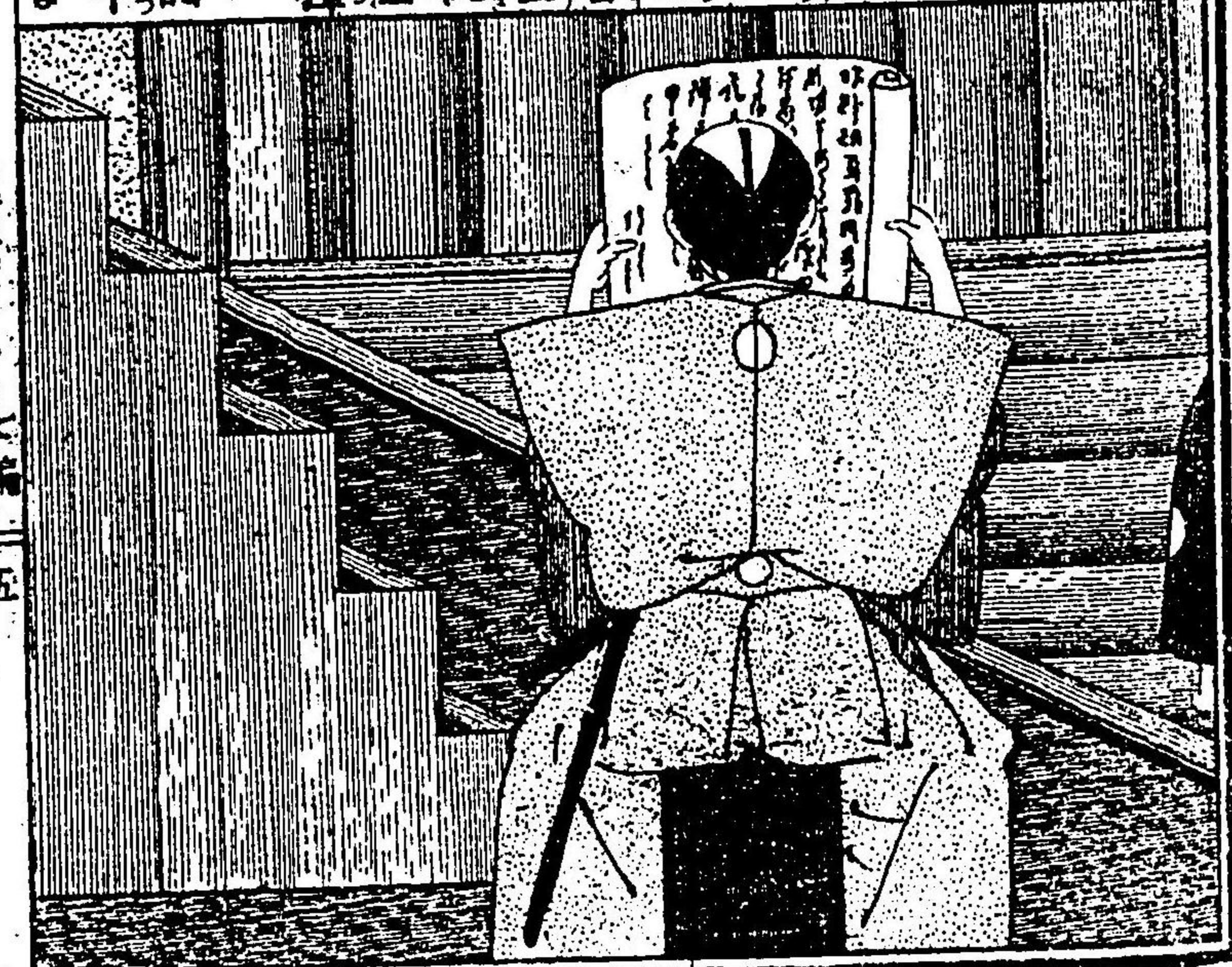


相糾上は呼出べし。介許旅宿ハ何成哉と問
 為十郎答て俺們止宿ハ御城府通町二丁目三
 星屋吉左衛門の許ハ滞留仕りて罷有侍ふこ
 万乞御仁政の御執計ハ預り御聞添被下侍
 ふ絆を偏ハ莫グハ上奉ると云速見ハ打点頭
 て夫ハ心得より且旅宿へ引把風説等可追
 日呼出絆も有んと有息ハ浮田主従ハ辱
 と礼謝して眠て旅宿ハ立還る憲司速見ハ此
 願書一存ハ不能と大目附多良尾主膳と老職
 坂井玄番頭へ内談有息ハ坂井多良尾両士も
 大ハ駭然之俺們的分別ハ速難一老職譽
 殿へ披露而老臣一統評議を成て介宜き議
 任中可速速見坂井多良尾の三士譽田が第邸
 きへ赴き息恸て三士ハ譽田雅樂助ハ對面成
 て伴の願ひ書を披露ハ速速ハ何仕ん哉と伺
 ひ息ハ雅樂助ハ兩書を讀畢て大ハ駭き體熱
 々思ハ星名愈々介旧惡有ハ勿々主家の御師



福井憲司ハ
 浮田主従星名ハ
 惡ハ告訴す

範ハ可為的ハ非却而俺君の御恥辱と成絆
 なり併和殿們的意見ハ奈何と有息ハ坂井多
 良尾辞揃へ俺們存了処同意之就夫星名を物
 門の一條悪く暴立るハ逃走らん然時ハ浮田
 主従願も空く却而御當家を怨む可ハ依而俺
 們貴殿へ披露仕り宜き御計策を以て渠の責
 否御吟味有間欲ハ存せると述ハ雅樂助頼
 美諾而奈何も神妙の仕成と云可某計策を以
 て明晩星名を私宅へ招き示々而彈正の返答
 を試る可ハ今日ハ未時刻も早息ハ且浮田主
 従的を某宅へ竊ハ招き渠ハ箇様々々問糾
 んと思りと云ハ三士ハ感伏成速見ハ先ハ座
 を起て俺第知ハ趨取リ猛可ハ小使番ハ指揮
 成て通町ある三星屋へと遣ハり



〇四十七回 譽田雅樂助浮田主従ハ對面の話
 扱浮田主従ハ猛可ハ憲司の被召呼ハ早
 速不心成ハ使番ハ屬て役宅ハ至ハ速見大ハ

讚美而其許願の赴旨早速御老職警田殿へ内
密披露遠一処警田殿其許達被問仔細も
有由成依之て招り自是刑部同道成へ
迎速見ハ浮田主従を具て警田が邸へ急行刑
部浮田主従者同伴致侍ふと告免バ雅兼助大
喜悦余的疾々呼び給へと被稟バ速見ハ兩
個を雅兼助が前伴侶より雅兼助ハ声を懸
て近く招き其許達の志願感る余り有不遠
ギ望を遂さす可と有て為十郎鹿藏と賞讃
有ハバ傍有懸坂井多良尾も等く声を合
め然而雅兼助被稟免ハ偕即刻其許達を為招
ハ敵の實否を微細に聞ん為之介博未告侍へ
り介謙に應而計ふ旨有と尋ね為十郎低
頭鹿藏を看返稟汝從此方容子仔細見ハ
有ハ次第言上仕べいと云バ鹿藏進み出下恐
ら下僕緯の一伍一什を稟上べい迎大館國遠
の最初より今朝榊橋にて不測星名を看止迄



五六箇年の自他話説を辨舌殿ま中演聞へ
かバ為十郎も介漏詞を継將今般願ひ書の
與記の姓名浮田民助と記見侍ふも一ハ亡
弟の志標を憐愍二ハ主君表向の存命成ぬ
拙者為十郎の躬上を憚り三ハ復讎免許状
民助へ被下藤も侍れバ此三箇條の遠慮を
以て浮田民助家僕鹿藏と記侍ふ一入御憐
愍を蒙り度と涙を落而願ひ免ぞ雅兼助深
く感直道成其許們が志操最も然社可有緯
之誠長盛藏人々執計ひ實々大國の老臣ハ
人を助る緯誰しも恁有度物社某も長盛の
仁心効い刀懸て請負進キべい主君へ遂
一言上為て近介望全からめん心易く
相等居られよか俺亦別尋一條有抑々
浮田の第邸懸り外面構門内の模様仔細語り
被稟へ是亦手段依て用処有と問れ免
バ鹿藏第邸の分楚を解明細告りかバ雅兼



助委細記止其許們明日ハ深く竊て音中以下
 他出さべりぐ最も竊る夕過より而俺宅へ
 被末々きく此此方ハ要向も有と被東見ハ
 浮田主従小寛仁成詞ハ深く恐惶して偏御
 仁惠仰ぎ奉ると演り干時速小夜更て子刻
 と成見ハ坂井多良尾速見の三士も辞退を告
 て亦翌の夜を約し見ハ浮田主従も三士へ一
 々憑きて俱退出を願ひ見ハ雅樂助下僕ハ
 指揮して附屬せ三士諸俱城門を通り三士の
 人ハ途中より扯別れ三星屋送り届けられ主
 従是を厚く謝して下僕と第邸へ還りける
 ○星名彈正警田が第邸へ招る話 徳而警田
 雅樂助ハ小翌日書牘を認め家僕ハ齋ハ星名
 方へ遣し見彈正小書牘を披き讀み佳有到来
 就従夕景獨樂も那哉案く牛貴必御問雅
 御在成ハ光駕給らハ歡悦へし有彈正俺躬
 を欺計るしと夢も知ず警田の招き預る



立身の棧梯共成と飲ひ早速使ひ面會し拙
 者御招の芳翰を戴き大慶至極謝し奉る後刻
 泰を以て御禮稟し上べく侍ふと述使を返せ
 り家士立飯て恁と告見ハ雅樂助ハ為仕濟と
 打笑たり然而小鳥も晩果ハ頃坂井多羅尾速
 見の三士浮田主従も来りハ雅樂助ハ間
 を分て立竊せたり姑成と星名彈正家内乞
 て入來ハ雅樂助誘て設一席ハ倡引口演畢ハ
 雅樂助家士ハ命ト星名が扈従を還し然
 て雅樂助彈正ハ對ひ今宵ハ寛々相語り座
 と云つ酒肴を出て酒盞を進めて酌を為ハ
 彈正酒盞頂戴き御酌ハ余ハ恐れ多しと辞ふ
 を雅樂助打笑ひ打撃きて酒宴為ハ礼儀辭讓
 ハ窮屈ハ主客無礼講にて率々傾け給へ逆敷
 献を累ね醉を生トぬ雅樂助ハ此容子を看て
 教々武藝の話ハ速く星名も好む道成ハ手
 柄話を云出せり此時警田稟出申ハ某若年の



警田星名が召さ
 謀つて其悪

刻り不覺を索め今も不忘鬱憤の絆有那も
 酒興成バ話べ一某若年の刻諸國武者修行
 為出時阿波國祥瑞城府にて音川侯の藩士浮
 田傳五右衛門と云的と試合し其此的は健
 か撃居られ散々渠は悪口を受たり今も介無
 念時介刻洋田を討て立退と思いが共整不
 丹練の為手出却而此弱を討果されなバと口
 惜を忍へ立去たり介第邸ハ外面七間余リ
 て冠木門を構へ左右に長家有て赤壁の扉正
 面ハ玄関右の方勝手口有て替古場ハ左の
 方の長家は修い一年指ふれハ早十六年
 相成の今も渠奴が宅の絆やら忘れず又兩個
 悴有りがと云稍思惟而夫々兄を駭か為十郎
 と呼弟ハ介節幼少して介名ハ最早忘れたり
 傳五右衛門も童今ハ余程老若たらん喻も
 稟も坊主悪いと袈裟迄悪いと追て渠が身倚
 成共討殺ハ耻辱られ無念も晴んと憤怒を



其二

懐き候んと実一やか一欺計見ハ彈正ハ莞示
 笑是ハ符合せ一絆も待ふ命の如く浮田第邸
 休ハ唯今日ふ処寸分不差能御覺へ被遊物哉
 是ハ某躬の一大事侍へ共尊君洋田ハ御怨
 有ハ聊示御散念可相成欤と存ト奉れハ東
 上人音も御他言ハ為給る可りハ元來某ハ
 阿波祥瑞の城主音川頼元の藩臣大館七郎右
 衛門と稟せし其意恨の條侍ふて六箇年以
 前彼地に於て命の傳五右衛門を討て立退日
 來の鬱憤晴し侍ふと云ハ雅乘助膝立直し原
 來貴殿音川家の藩臣にて体恐有傳五右衛門
 を被討取しか夫ハ心地宜話を聴り介意恨
 と云ハ如何成絆や介轉末承ハりたりと頻り
 彈正を賞美して促し是彈正ハ酒氣ハ浮れ
 圖に乗て已が旧惡を詳細述專君洋田を怒給
 ふ御心を静ん為侍倦一大変を口外仕るハ穴
 賢人ハ御風説ハ下さる不可率御返盃と酒杯



瀧き差出せば雅楽助ハ諾快氣ハ打笑へり

○四十八回 星名罪惡露頭て驚く話

譽田ハ尚星名を讚賞て為十郎兄弟の重杯を
聽し彈正手柄頼して實座言把交て鹿煮が成
行迄話説れり坂井多良尾速見の三士洋田主
従も始終を聴取或ハ怒憤或憎悪殊更主従無
念の決し歯喰縛りける時節譽田が家士雅楽
助が前より出両手を突き東鬼ハ御酒宴字ハ
御座侍へ共會今坂井多良尾速見の御三個御
同道にて御入來侍ふ那哉政支御問合せし就
き御直談東上度由にて玄關に御扣へ被遊侍
ふ奈何計い侍はん哉と伺ひ鬼雅楽助太く為
酔体にて夫ハ歴々の未臨不苦ぎ是へ御通し
粟べいと家士を為立ハ彈正ハ譽田に對ひ御
老臣方御來臨し拙者同席憚り有り云と譽
田ハ打消て否御遠慮ハ無用と止る処へ三士
ハ打列立入來て口演終て各々座に着き頓て



坂井粟様借早急の議し侍へ共今日憲司廳へ

出訴の的有願願願難儀の條は付き速見

氏倦寺方へ参定は及れしが拙者等評議

も協難く不止得貴殿へ披露粟さん為め推察

仕りぬ願文御覽被下べしと指出せハ譽田

之を一見して深く打敷く容て是ハ不怪釋

哉星名氏を親の怨敵成ハ討め給へとの願

文く喃星名氏奈何せん云れて彈正仰天

自悪と吐て介屬も干ぬ時節成ハ覺無とも

云難く然ど不敵曲者成ハ粟鬼ハ命の條其

無非然れ共介願人の姓名を承はされハ

覺悟仕ら幸と答へハ雅楽助多良尾に對ひ御

响芳なる主膳め願文と高声に讀給れ

有鬼バ主膳諾して願文を讀上る介文は曰

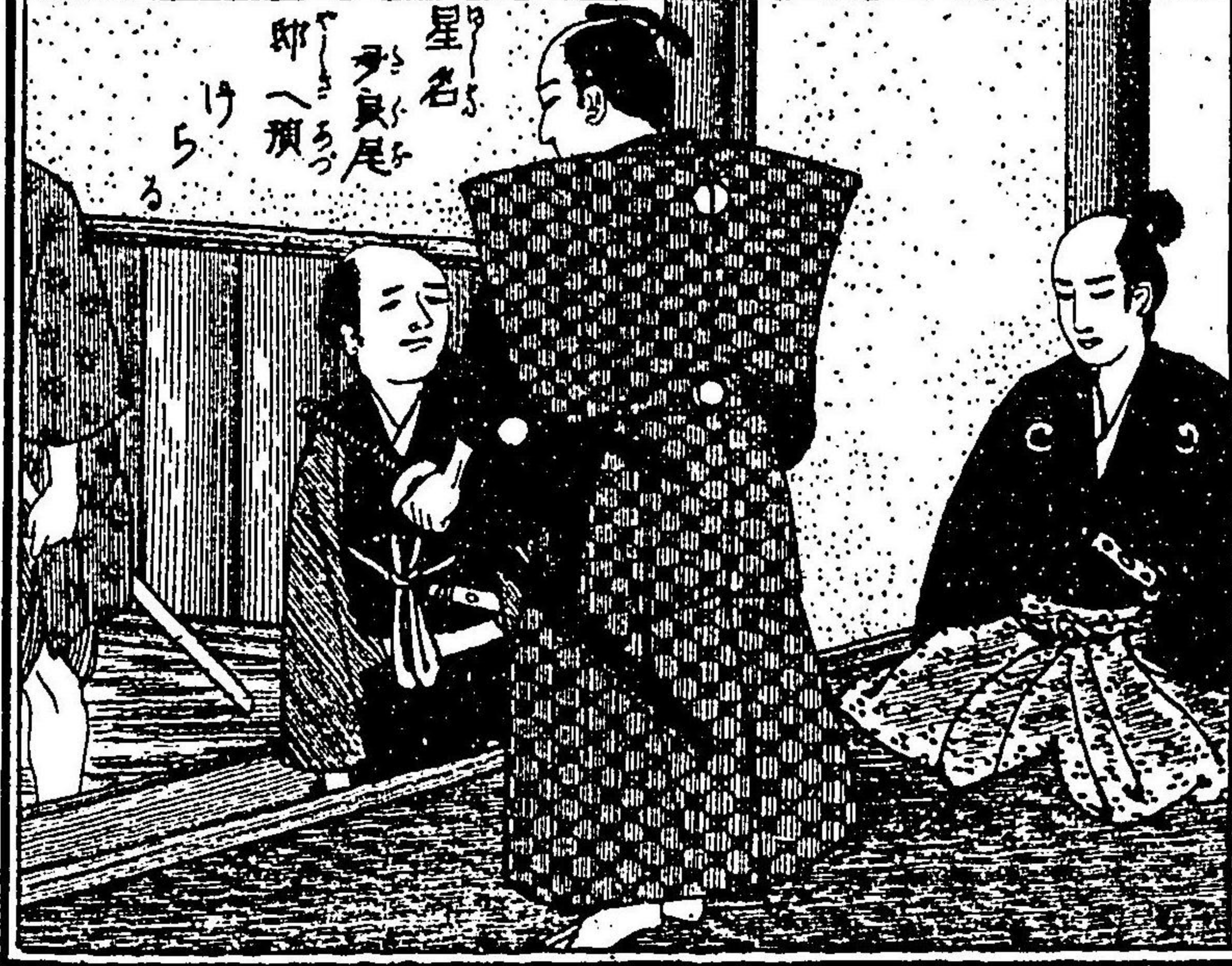
「恐れ乍ら願ひ上奉る許給之夏一當御番中

木傳流劍道師範姓名星名彈正与東的ハ元來

某本國阿州祥瑞城主音川右京大夫の臣下



侍ふ旧名大館七郎右衛門と稟的侍ふ此的六箇年以前應永七年十二月朔日の夜深門人橋左近之助諸共某第邸に竊ひ込侍ふて早怯よも愚父傳五右衛門を暗殺仕侍ふ処橋左近之助ハ八介場討止侍へ共大館ハ把逃し稟侍ふ故孝道背き無念止難く依之て主君へ敵討御免を願ひ翌年正月御聞相成本國を出立仕り侍ふ凡そ六箇年の今月今日御城府柙橋にて通行を看止派御藩臣の身柄を以て無是非介場を看通侍ふ哀れ御免許を蒙り星名各拜仇討成しめ給り侍り廣大の御慈悲よ存奉り侍ふ此段御聞濟被下度伏而願上奉り侍ふ則ち音川殿よりの免許状も亦封入置侍へバ御賢覽希ひ上侍ふ以上應永十二年乙酉六月十九日音川右京大夫臣浮田民助正道同下僕鹿藏御憲司様と讀了り再音川の免許状を押披きて讀上る余文言は曰く



「一方の臣大館七郎右衛門と稟的不良の奸人而同藩浮田傳五右衛門と稟的を撰り暗殺致し國を立退侍ふ処浮田民助憤憤存し復讐願出侍ふ就き余孝心を感るの餘り當般速く差許置侍ふ然バ民助何方にて敵に出會侍ふ共速く孝子の志操を遂さしめ復讐宜敷御憑入侍ふ依而証書如件し應永八年辛巳正月日音川右京大夫在判諸國御城主並び津々浦々御役所し讀上るバ彈正不惚衆士云様奈何も余浮田傳五右衛門ハ意恨有て討果侍ふ亦倅民助も某討取最早民助の有様も亦民助ハ正辰と云る此願文ハ正道と記せり正道とい兄為十郎名乗之介為十郎も自滅而世は有ギ之下郎鹿藏奴が知ぬ浪士を語り民助と偽り助斂と而るせ所為の忠義立成人偽謀の讎討誑同様勝負仕るよ速へりギと言曲たり



○星名多羅尾第一押籠らう話 蕃田雅樂
 八星名が辞を不聞振して速見は對ひ刑部殿
 八洋田民助下僕鹿藏を定て得与被看止た
 らん人物奈何体的成りや刑部答て民助ハ瘦
 男よて面白く鼻高く年齢廿八九才と看て待
 ふ亦鹿藏ハ面清く眉秀て鼻高く些し肥肉は
 て年齢廿五六才と看て待ふと東鬼ハ星名心
 の裡ハ大に駭然民助と名乗来ハ為十郎と覺
 中渠奈何して存命居ヤ不審し殊に悉きハ鹿
 藏奴今宵中ハ透電為度者ハ社と疾逃尻ハ座
 も膝戰く雅樂助ハ星名ハ對ひ貴殿暫時窮屈
 目ハ御在共俺們役目の廉も有ハ大法の如く
 目監多羅尾主膳へ從今晚貴殿を預け稟キベ
 主膳侍候是は被来れハ同道して引把給へ
 か一某悪くハ計ハ稟キますと云れて彈正再
 度悔り今ハ拒む術も無志なく乍ら系引た
 り三士ハ蕃田へ稟キ様星名氏系引の上ハ直



様同道致キべ一彈正殿御兩刀ハ暫時俺們ら
 中へ預り稟キ可いと云ハ星名無是非兩刀を
 遮壁ハ速見ハ之を受把て三士の人々雅樂助
 へ辞退を告豫て準備の轎物ハ星名を乗せ廿
 個の下司ハ前後左右を把固ませつて多羅尾
 の第邸へ列飯り一室へ押籠屋夜二十個づ
 の番士を相添嚴重に護る故彈正奈何とも為
 粹能はず妻ハ妻見る心地成り産悩れて日を
 過しぬ恁て翌日蕃田坂井ハ打伴侶て主君の
 御前へ出て洋田主從出訴の粹より星名彈正
 を招き寄て心裡聞料為粹の赴旨民助鹿藏
 六箇年の間の話説為十郎國達の轉末主從長
 演ハ再會同道の粹迄悉皆言上る速れ見ハ
 大守越前守將久深く駭き給ひ予星名を然悉
 人ハ知中獨り野基兵馬口入を以て武術
 を試して召抱ハ今更願る恨り之不義不道
 の曲者を而師範を命せし粹予が不明して他



會大生身長...

十七

家へ聴へては俺耻辱成ハ孝子忠僕の志願を
 憐愍宜し復讐を遂させ遣まぐ一最も星名門
 人の的師匠の肩を持って加勢助剣杯致す的
 有バ一々搦め捕へて死刑に處まへ一急ぎ復
 讐の場処を撰立派に勝負為致まか一予も
 當日ハ見物ハ出ん汝門能ハ執計ハ一と
 最心易く御許容有けり譽田坂井の老臣ハ畏
 まりて御前を退出して下城に速び両士扯別
 れて第郎立版雅衆助早速使節を趨て浮
 田主従を急呼寄大守御免許の命を傳へ息
 バ浮田主従歎入解限りなく雅衆助を伏拜
 涙流して礼謝る一息恸て浮田為十郎譽田雅
 衆助願て曰く拙者國元主君の手前ハ生害
 仕り侍ふは極りて老職長盛藏人殿の仁計
 依りて當今父の讐ハ出會侍ハバ一應長盛殿
 へ内届仕り余上復讐仕り度侍ふ是未と朝日
 丸宝劍搜索不適侍ハ裡まらバ飯圓の処を伺



ハん為侍ふ方右國元へ傳度依飛脚上下
 二十日計り勝負延引願ひ侍ふと稟せバ譽田
 是を兼諾而聞届けハバ浮田主従余恩を謝
 して旅宿へ退きける

○四拾九回 浮田主従四候へ書と贈る話
 儲主従兩個ハ旅宿三星屋に飯り為十良直
 長盛方へ細々と書簡を記送り息ハ鹿藏も同
 く筆奪て尾州斯波殿の藩臣小戸田弥三兵衛
 方亦奥州會津芦名殿次一同久松浦山左衛門
 の許へ書と認め早奔りの脚夫を以て差送る
 此時鹿藏ハ故意と本國肥後へ書を送ると左
 扣へ息故為十郎不審く思ひ尚を鹿藏の素姓
 を委細問ハ鹿藏今迄日向佐土原炭焼の伴成
 と偽りしが今ハ包由ま久肥後菊池家の
 臣佐野出羽之助ハ一子鹿十郎成辨を明し語
 れバ為十郎大驚き猛可ハ鹿藏を席を下て
 押し息ハ鹿藏又為十郎を元の座に進め素性



右も有左も有主従の中は礼義乱してハ拙者之を面目せんや小祿大祿の差別を論ずるハ畢竟他人向の粹主従三世奇縁の因ハ况んや先御主人ハ下僕の命の親之且復縁を相果キ迄ハ當今迄の條主従ハ侍と云ハ為十郎打点頭テ和主の義心成ハ然も有ハ併人ト聽テ余本國へ某方ノ之を届けキハ是亦武士の義ハ差ム可トテ鹿十郎の射上を詳細カ一認めテ為十郎肥後へ脚夫を差立たり然テ浮田主従商議して尾州會津の人教到着次第止宿の設けを三星屋の亭主へ委任人粹を依頼キ是誰ガ吉ハ或蕃田聽知テ大ハ駭然尾州會津の人教集ム時ハ其終棄置難かり殊ハ尾州ハ主家の本家此方も等閑ハ成難ト早速主君へ言上成是ハ將久殿聽給ハ實人ハ下劣成ト慢レバ却而己を慢ラウト云喻言有リ近代稀成武任俺國ハ来リ復離致キハ



予も本望成粹相濟ハ上ハ鹿蔵を召抱度物ハ汝能ノ之を計ム可ハ將本家並ハ會津家より人教来ハ是亦能ハ馳立セヨ最モ介節嘸混雜為ハ此段室町殿へ相届ハ介檢使受下ハ濟ベウハズと命ハ蕃田長サリ即刻京都へ使節を立て梓の始終を言上して檢使を乞見ハ室町殿より松井主水大坪新助の両士を福井城へと差向ラウ亦浮田より音川家へ超遣したる脚夫三日目ハ阿州に着キ書簡を長盛ト呈見ハ兼人之を一見して猛可ハ登城成テ大守御前ハ出為十郎の書を御覽ハ入所存を言上ハ為十郎の罪を御免給ハリ浮田の跡相統の粹を只管兼人願ひ上ハ君寛仁の御心を以テ兼人の願ひを御許容有テ汝大儀ヤラ人数を引具ハ越前ハ赴キ為十郎並ハ鹿蔵獲繼相濟次第類ハ引伴飯圖キベト命ト給ハ兼人令養して御前を下リ直ハ準備して



啓行一六日半にて越前福井へ到着せり
 ○佐野出羽助庵子の存命を知る話 爰亦
 肥後菊池家藩臣佐野出羽助方ハ浮田為十
 郎よりの書翰を看て九箇年以前家出は速び
 生死の程も不明一鹿十郎存命居り將音川
 の藩臣浮田傳五右衛門に助け伴はれ狂病
 為愈恩義を感して主従の因を結び一釋より
 今家大變有て主従討討は為出轉末今般越前
 一於て介敵を看出不日討果すとの釋微細記
 載を讀み出羽助室の秋篠も或は悦庵子
 乍らも頼りし褒又武士の心も恩愛の情胸に
 迫り涙を浮べり此時同藩士の佐島丹羽亮所
 用有て佐野家へ未合せ鹿十郎の釋を聴て是
 一思ひ寄らぬ吉吏なりと大に祝し感賞せり
 出羽助倍々歎ひ稟す様為十郎の知せよ就て
 一屋川興州阿州の三侯何きも余加勢の人数
 被遣べ一然バ此主従の譽を以て看まじ庵一



一之を卒飯り召抱へんと為ハ明か其便を
 不聴ハ無是非共存命と知てハ憶く最も子
 舎住の悴と雖も原ハ主君の御家臣今無謂
 他家に被召抱てハ公私の耻辱も成侍ふか万
 乞此段大守へ貴殿御披露を願ひ度某直々迎
 把との御意下らぐ姑御暇を願ひ赴き侍ら
 一ハ此義御前宜しく御執成入と望見バ佐
 嶋頭一兼諾して為十郎が書簡を持て君の御
 前へ出右の次第を遂一言上して浮田が書簡
 も御覽し入るかバ菊池武胤殿恩賞有て鹿十
 郎が叔父道明寺山城助を召出され示々の由
 を命有て鹿十郎迎への役を命ト給ひ五拾個
 の人数を差添へ給ふ道明寺君命を令兼して
 準備を成六月廿五日肥後八代を啓行して途
 を急ぎ七月三日の夜越前福井に到着して万
 屋と云ふ旅舎に止宿して直に使節を三星屋
 一遣し鹿蔵同道為人辭を告るかバ鹿蔵頭一



諾して使と俱る万屋より來り叔父山城助に對面して實父を為偶思を成互に歡び無恙を祝し九箇年間の長話説を成り山城助ハ感賞し大守の命父母の傳言杯細微と言含たり亦尾州小戸田方よし鹿藏り差立し書翰を看て大駭然且歡悦頓し此由披露し遠く朝倉兵庫之助斯波義重殿へ言上し斯波殿大悦有て小戸田亦三兵衛を召れ内意を被為命且加勢の人数を興らる小戸田今兼りて御前を下り余準備を成て啓して福井に至り鹿藏り對面有是ハ鹿藏大悦して先年の恩を謝し尚今般の加勢を歡こび厚く礼を演書簡に漏る處を話説れり亦三兵衛も一別の情を述有望の時為向を祝せり鹿藏再て申様某主人為十郎殿より復雜一條音川家へ言上有り故已老臣長盛藏人殿當地へ奉着有是亦無余儀訳侍ふ故と語り小戸田之を聽音川より人数來

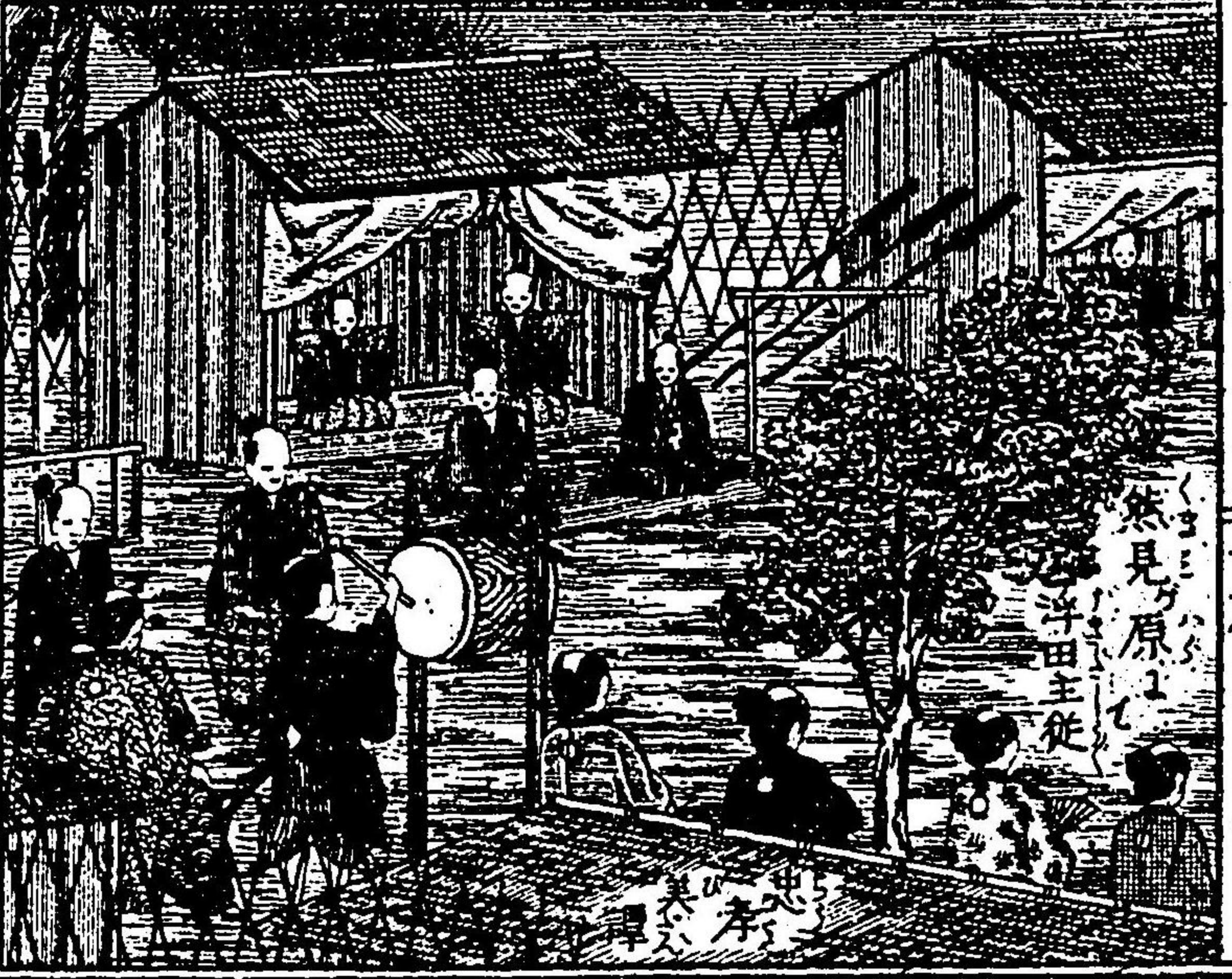


ハ必定主従共卒飯る所存成と推察り太守復讎相濟ハ鹿藏を伴侶飯る可との命も有る密に此由本國へ通せり爰に六月廿九日奥州會津若名族の老臣菅清右衛門君命を奉養り加勢の人数百五拾個を卒て福井に着り亦同國松浦山左衛門も管と同道して三十人の應召卒同日に着り亦原村綿屋久兵衛青山正伯の兩人も大守の願を上げて此度松浦と俱に未れり松浦青山綿屋久兵衛ハ三星屋に未て鹿藏り對面して各位別後の情を述聞へ復讎本懐を祝し鹿藏も三個の恩義を感謝し未訪を歎い尚會津啓行後の話説を双方に為殊に久兵衛正伯ハ鹿藏り恩を謝り更淺らきり見

○五拾回 長盛藏人浮田主従を召す話
然程音川家の老臣長盛藏人ハ使節を以て浮田主従を旅館に呼寄せ久々の對顔有是ハ

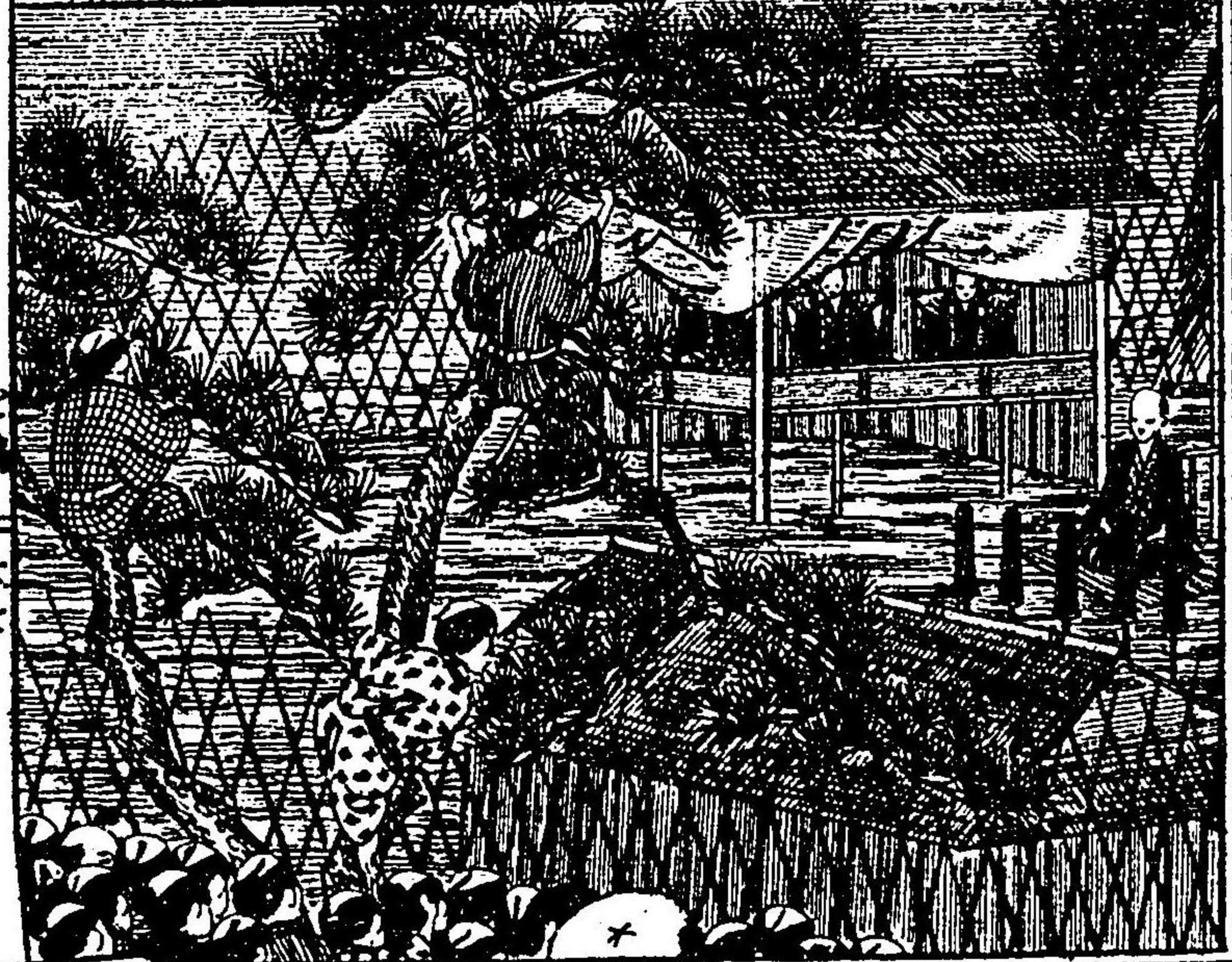


為十郎衛の洪恩を謝し低頭して感涙を流し
 詞を鹿藏も辯討出立の節惠を為得仁思
 を厚く謝し民助ら歎死を嘆き息バ藏人忠
 節を賞美して被申息ハ為十郎の書翰披見而
 主従六箇年の為躰具は知り民助が歎死ハ
 今更無是非併一當殿為十郎一再會而敵の在
 処を看出し近し宿意を遂るハ藏人も満足
 思ふ是全く足下の忠誠ハ亦素姓を聴けバ菊
 池殿の老臣佐野氏の次男と哉実ハ行狀匹夫
 の不逮る次第なり主君も殊の外は感賞
 一某へ被命付ハ更め鹿藏を召托へ望の
 祿を興ふ可し御意有是ハ浮田の縁を以て
 他家へ仕官の儀相成す豫而此儀兼知可有
 迎天昆押言出息ハ鹿藏之を即谷成兼平
 伏而有しが稍有頭を上申息ハ大守の尊命
 有難存一奉る然共下僕元末本國の父母未
 だ躬の暇を受りて出侍へバ巳の骸巳の俸



然見原
浮田主従

一不成侍人畢竟浮田は被救一恩を報はん意
 を以て主従の因を結び侍へ共今般更め下僕
 の躬上親們的耳入侍人上ハ双親殊等て煩
 一對面を望侍れば是非共一旦飯國仕り國
 遠の罪を侘侍ハねバ孝道も不全キ尾州會津
 の両侯も御懇情の御招を蒙れ共下僕此意
 を以て辞退仕り何れ余義ハ御請不申此段御
 賢察給ハる可し理非明瞭ハ述息ハ流石の
 長盛も二言と不挑感激而余日ハ主従を旅宿
 へ引取せり然而余次日長盛ハ為十郎耳招
 て密に主君の御内意を告足下官キ鹿藏をバ
 暇乞共被出べりトキ復讎為遂後ハ必定本
 國へ鹿藏飯人と可云介時之を拒む者ハ徒足
 下外ハ不可有尾州會津加勢迎も食内心ハ鹿
 藏を國へ卒飯べき設け能心得給と言含息
 一為十郎季細畏り申様今般尾州會津の両侯
 より加勢の人数泰り將本國より渠の叔父道



明寺も到着し今ハ某の家僕と雖も衆人の尊
 敬ハ威勢某の可速ハ非ず固リ二万八千貫の
 佐野の子息某の躬ハ比較る時ハ鹿藏と呼も
 最憚る様侍へ共渠義心堅き故主従の札譲ハ
 些し不亂殊ハ會津の長者松浦と申的今般の
 雜費ハ於てハ黄金何程ハ有調達為へしと
 申せり之一藤の大守の後楯より手剛く且
 渠六箇年千辛万苦を凌ぎ竭す忠節を思時ハ
 躬ハ寸功も無き某が主従成と言立暇不出迎
 國元へ卒飯ハ渠の勲忠破るハ當るべし是
 等を轉ハ勤弁仕れば某一言し申詞ハ一審御
 老職様の御口達を以て國元同道憑より便
 一と若長ハ長盛も温順の返答を感トける
 ○熊見原ハ浮田主従復讐の話 恠て今年七
 月十二日譽田雅泰助上意を蒙り町憲司速水
 刑部ハ命を傳へ浮田主従を役宅ハ呼寄せ刑
 部兩個ハ被申渡様ハ已ハ二十日も為畢ハ來



十八日ハ願の條復讐御免被下物ハ則ち
 介場所ハ御城外熊見原と決めりる前日ハ
 介准備被為へし有息ハ浮田主従ハ有難御
 受申て勇々歎悦役宅を退き直ハ介脚て四
 家の旅宿ハ廻り復讐定日を告知せ三星屋ハ
 飯リ介准備而等ハ息當般復讐の場ハ熊見原
 の廣野ハ越前侯作更方ハ被為命て一丁四方
 一行馬を結團繞ハ四方ハ杖敷を懸並べて正
 面東方ハ征夷家の檢使を請する座南方ハハ
 音川菊池の座を設け北方ハ尾州會津の座
 一西方ハ越前家の座とせ爰ハ七月十七
 日從大守山内左門と云家士を上使と而多羅
 尾ガ第へ被遣星名彈正ハ上意を告聞て曰く
 當般音川の臣浮田民助更復讐の願申出るハ
 就き段々介一件を聞糾せ一処介方以前ハ音
 川の藩臣ハ無罪傳五右衛門を殺害の由甚
 不道の致方ハ依而今般浮田ハ願ハ任せ明



日當所熊見原に於て尋常の勝負成遣可と
 上意恸の如と為速見正心は深く駭然が
 今更那と拒む術なく不肖々々御受申せば
 左門ハ介終退出成見初當日十八日の早天よ
 り而熊見原へ難討を者と趨集る者雲霞の如
 く行馬の外は逼与迫り恸て大守斯波將久殿
 譽田坂井の老臣引卒西の棧敷に為入給ハ征
 夷家の御檢使を始め四家の老臣達も立揃て
 三方の棧敷に分て着坐有其人数都合六百余
 人とぞ聞へたり頗て多良尾主膳屋名彈正を
 同道して設の場処に入來り西の方なる休足
 処に入見屋名ハ今日の形勢最重成致き且
 四家の老臣為出頭を不審に介謂を主膳に問
 示々の釋成と鹿藏が躬の一伍一什を話説
 息バ彈正肝を消たり息亦浮田為十郎佐野鹿
 藏ハ速見刑部同道して東の方の休息所
 進入り屋名が今日の打掛ハ越後上布の帷



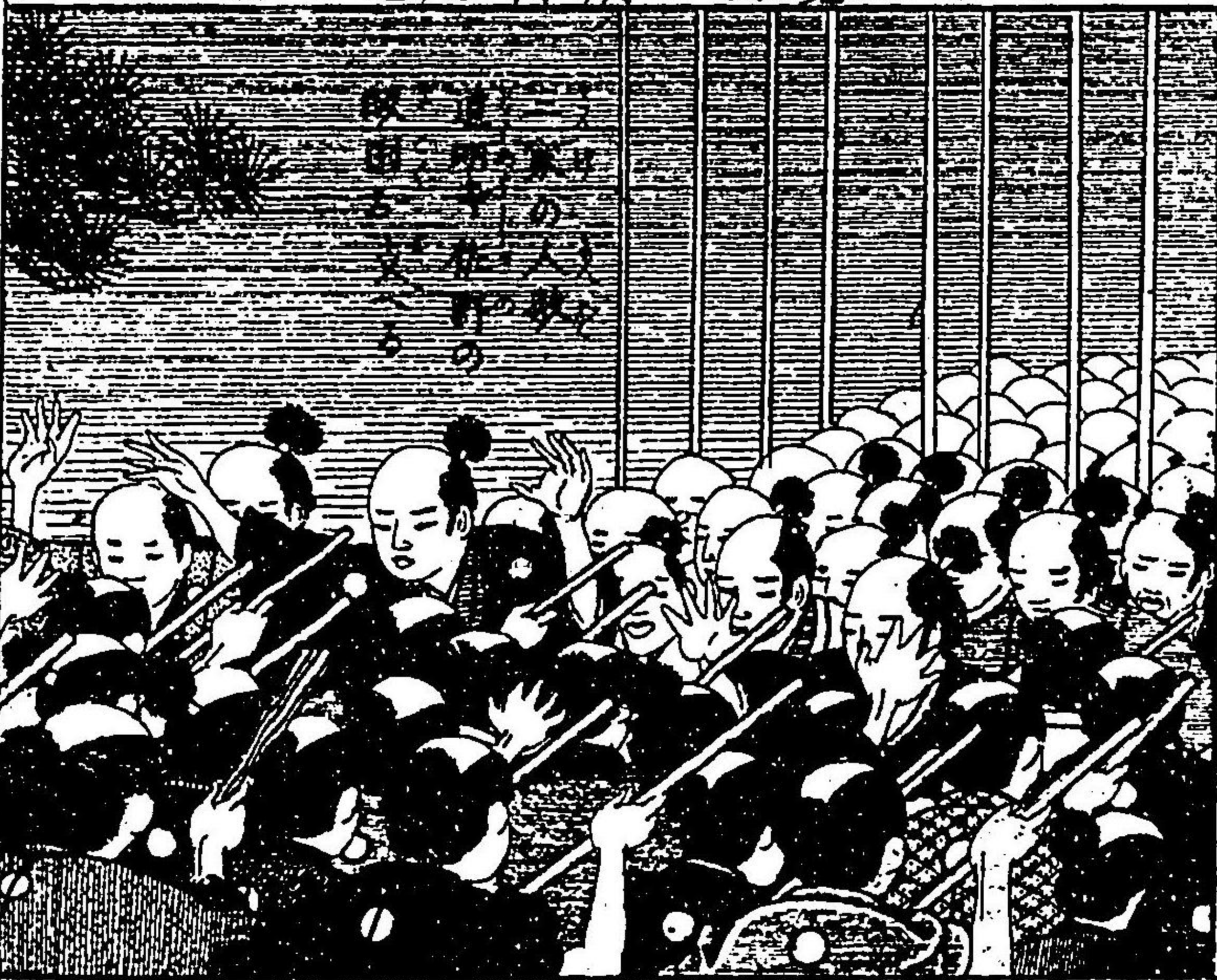
子丸一引の定紋付を着一栗皮茶色の
 麻袴を着而股立取り白布を三重に帖三耳上
 より後鉢巻を締同布の玉禱巻を懸け腰に
 彼朝日丸の宝剣帯たり彈正年四十一才
 身幹五尺九寸の大兵へ亦浮田為十郎ハ浅黄
 の帷子に麻袴を着股立取肌ハ鎖の着込を
 堅め白布の後鉢巻を締め玉禱巻を懸け衣服の
 紋ハ分銅を付たり大の刀ハ民助が紀念の
 志津三郎兼氏の名刀を腰に帯り次ハ佐野
 藏ハ水色の帷子に丸揚羽蝶を付しを着し
 段添の麻袴を股立高く引揚げ白布の鉢巻同
 玉禱巻を懸け當般叔父山城介より送與一栗田
 口吉光の名刀を腰に帯せり双方例式の條
 土器拿て水盃を為し一層干て四方を拜し合
 圖の太靴を打鳴せし等しく双方場所の中央
 へ進み出れば復雜を着し行馬の外は群れ集
 り衆人喧と鯨波を上る声天地に響きて冷



まかりける

○五拾二回 浮田主従大館を討取る話

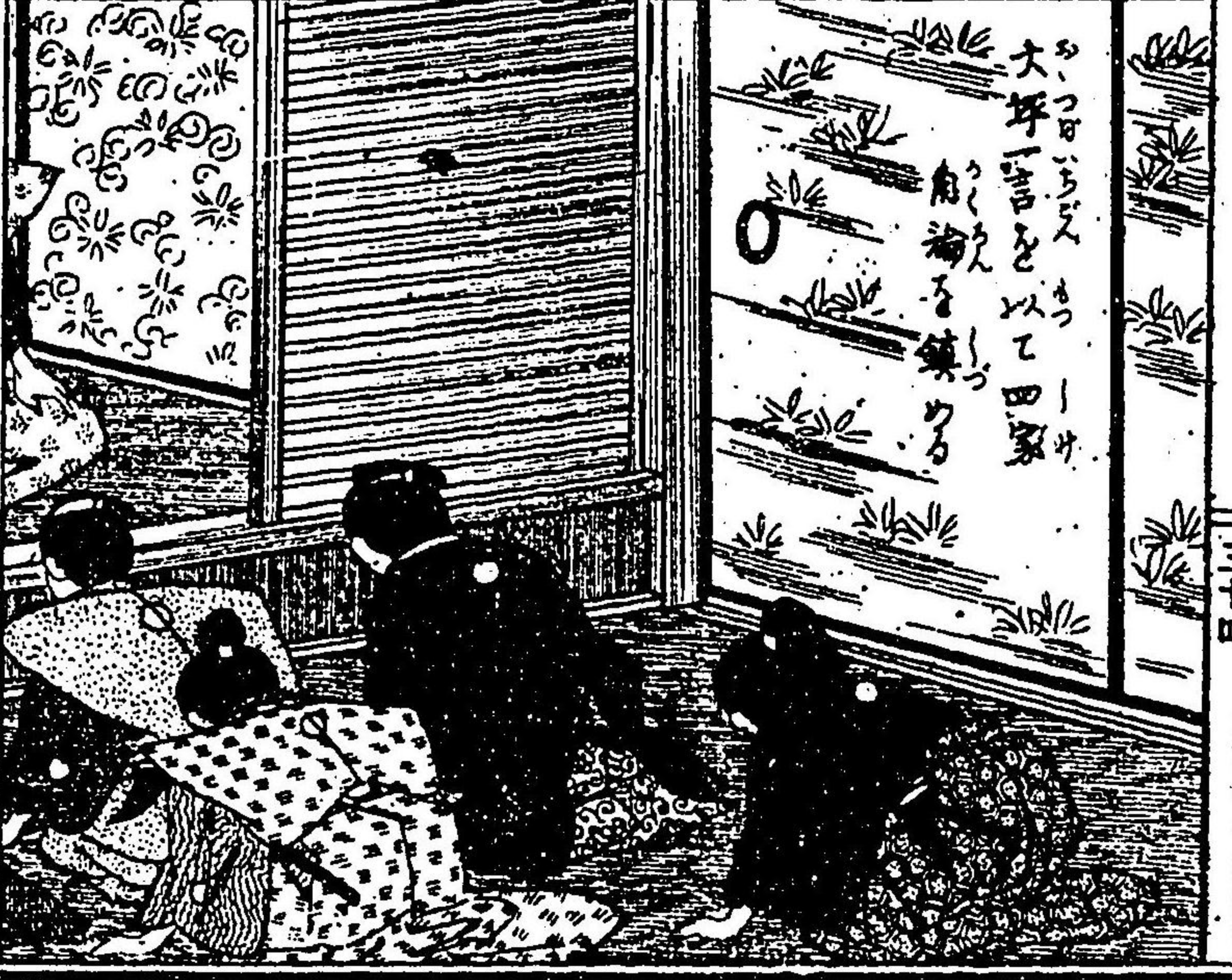
再説星名浮田佐野の三士の後継の場中央の
 至れバ附添有司双方引放れ退く此時為十
 郎進寄て星名對い大音申鳥ハ一別以
 來珍哉大館七郎右衛門汝は怨の有処ハ覺
 えつらん今日箇今遁ぬ場処率々尋常立對
 勝負せよ某う怨の刃を受け焔魔の廳に到る
 べしと詈詈つ兼氏の名刀抜放し鬼バ鹿藏
 も介後方進同く高声呼ハリ鬼ハ奈何
 狗侍士の七郎右衛門凡五箇年逃躲れ相貌を
 替名を更め命を惜む大腰板奴今日ハ最早逃
 道ま一汝此後継の由を聴能も脚膝不拔成て
 此處へハ歩出物哉是耳汝ハ似合群と率哉
 勝負と嘲哂鬼バ大館ハ怒憤を發而朝日丸の
 刀劍を推乱離と引抜き兩個を碇と貲付て死
 損いの浮田為十郎奴民助の名を橋に出バ



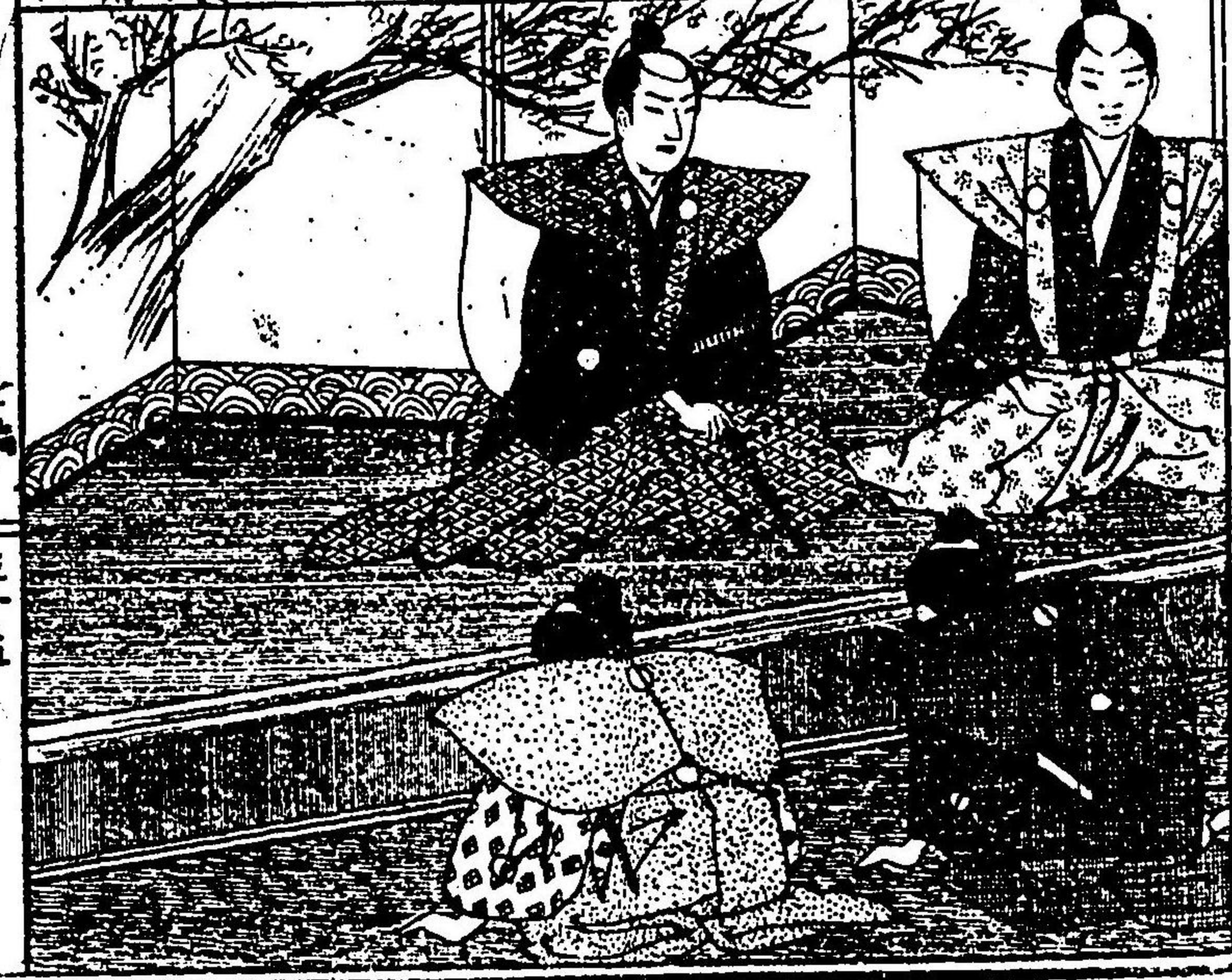
已も返討を望む処成人去大館の劍の引導を
 以て往生させて得さき可借後居る一文奴
 僕の鹿藏奴大井川の水屑も不得成今俺刃
 の錆を等処成か己存外の腮叩物哉然ハ兩個
 共ハ蹴り殺害成吳ん覺悟為と罵詈嗚りて
 為十郎ハ斬て懸ハ心得たりと受流一兩人共
 秘術と喝上段下段と斬結ぶ鹿藏始終大
 館の堂下眼を付右廻り左ハ駈行一付声
 懸け為十郎ハ勇威着たり杖敷ハ坐乗人ハ
 堂ハ汗握り瞬きも不為諸見物人ハ酔たる心
 地ハ静り轉て息をも不為者大館八年來練磨
 成す木傳流の術見ハ一憤勇揮て死物狂ハ働
 き鬼バ打込太刀ハ鋭く而為十郎も術拙き
 有ハ共動それバ受太刀と成て脚下空篋着
 鬼ハ鹿藏声懸け御主人姑ハ休息給へ下僕
 代て敵手仕らんと云ハ警護の有司門ハ心得
 て兩個の中へ搦突入ハ左右ハ漸く引分



大館ハ既ニ可討為十郎を為引分ハ悔敷思
 共無詮方此方へ歩いて姑息継り為十郎も
 水を喫て息を憩め居息漸有て鹿藏ハ進出
 刀をも不拔大手を葉掌て衛立つやをれ畜
 生侍士茲へ來よ大井川の返報辺手ぶろの
 石も無れバ砂塗と為呉人と嘲呀バ大館怒而
 悪き下郎の過言哉其処動ると罵詈つ飛懸
 て斬付を鹿藏躬輕ニ二三度勿飛かい潛て大
 館を脚以て蹴上披し腕首右手ヲ握握詰て
 金剛力ヲメ上つ大館が面へ唾吐掛たり大
 館ハ大力ハ利腕捕られ血の通も止る如く倦
 不知刀を把落せり鹿藏莞尔打咲い奈何七郎
 右衛門不刃向や汝如き畜生は那ぞ刃を用中
 可哉ハ拾殺キハ最易息は御主人の為當敵汝
 の一命迫而砂塗ニ成て腹を愈ん存分砂を喰
 と云つ腕引張て振廻し彼方此方へ引摺廻
 申よ大兵成大館起つ倒つ躬を惱され肩息よ



成砂塗れと成を鹿藏快氣ニ乍笑ら御主人
 討中汝の一命姑く休息せよと突放せば大館
 心跡勞たれバ踏止る緯不能而地上へ墮と打
 倒れ漸して起上て釘を拾い水を喫て休憩息
 無念口惜さ云様も非ハ熟々思惟而心は點
 頭左の掌は砂を掴み休息中の由断看濟し起
 寄て為十郎の面へ砂を打掛真ニツよ為と斬
 着息バ為十郎颯と躬を翻而怒の声を振立て
 曠の勝負ハ悍怯の舉動ハ術ハ喰と罵詈下
 ら振込剣を受流而亦も姑く切結ハ大館剣を
 振廻し死物狂い撃込と虽も鹿藏ハ被惱て
 己は十二分勞し上成バ自然太刀筋乱息ハ為
 十郎ハ為得と捲立て透間を覗い振込刀ハ大
 館の左の腮ひより肩先懸て斬着息ハ剛兎の
 大館も苦痛ハ不得忍後方ハ空籠砂を擲て尚
 投着ると為十郎面を背け踏込で一喝喚て飛
 懸り右の利腕斬落せば大館叫んで墮と倒れ



り此時五家の諸士群集の見物會一同に賞談
たり是大館八深蔭の苦痛は七轉八倒悶息は
鹿藏咲い進み寄鬢り欄を引越して七郎右衛門
苦惱ハ奈何悪報今社思知つらん存分悶て寂
滅せよと云つゝ為十郎は打對い下僕万乞一
太刀御免被下べしと云ハ為十郎打點頭年來
汝が忠節苦操其奴の一身快く仕る可と許
見ハ鹿藏怡び勇立刀拔持ち御主人御両方
の怨の及骨身受よと声を懸け破乱利と胴
切は打放ハ小息ハ絶果たり為十郎頃も趨
寄り大館が首打落せば衆人声を揃て手柄々
々と罵時動声少時不止置々たり此時為十郎
大館が刀劍を拿上熟々看よ是ハ奈何小躬年
來搜索キ主家の重宝朝日丸の宝劍成ハ駭然
緋大方成中鹿藏も此由示し噫悪べし大館
の奸賊主家の宝劍をも掠奪せり人非人奴と
大館が首を踏付劍を數度び頂戴き直は長盛



が前へ進行して宝劍を差し大館所持せし赴き
を告げハ藏人大に歡悦して將為十郎が働きを
感賞せり然而已に復讐緋果見ハ諸見物ハ勤
き起て愈四方へ趨散五家の大将老臣主従も
杖敷を下りて被飯さり〇五家の大侯鹿藏を
抱んと諍ふ話 恣て浮田為十郎佐野鹿藏の
兩個ハ敵大館が首を傳五右衛門父子の靈よ
祭て次ハ警護の諸士へ一札を述へ旅宿三
星屋に引把たり然而介夜為十郎鹿藏に對い
主従宿望を為相達上ハ互ハ介志操ハ果畢ん
ぬ今ハ主従の因も憚り多し何時迄も無礼致
へき哉最早今日迄之亡父亡弟の靈魂も歎
び成佛せよ一某更めて貴殿へ對し御礼申入
逆躬を謙遜て敬礼見ハ鹿藏之を止めて上座
に進せ命の如く年來の宿志も今日に到り相
達し侍人諸拙者釋御暇の儀今更可好所存無
之侍ら共先年國遠仕りて既ハ九箇年も父



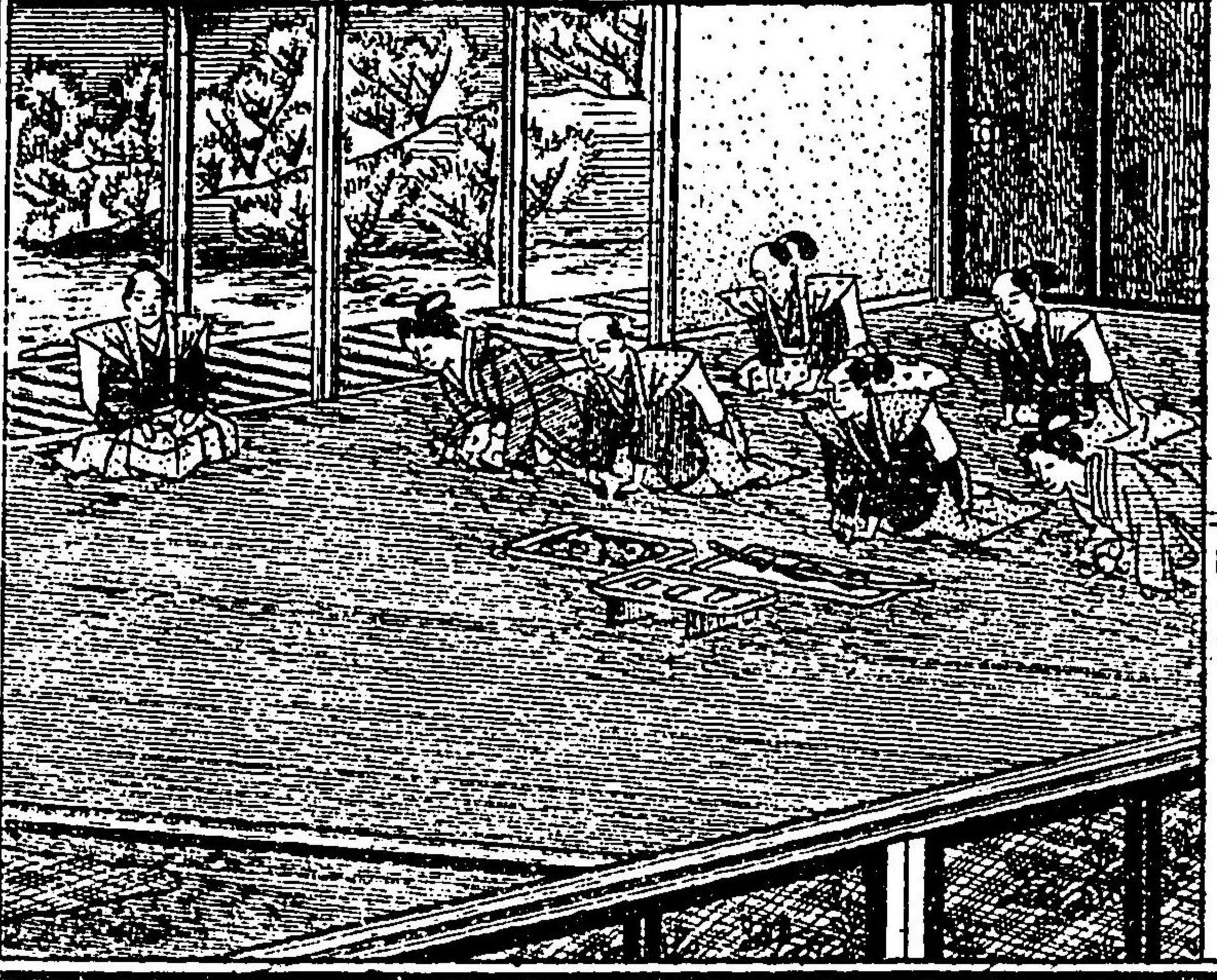
母の對面致さ最懂く存侍人依之て且本國へ罷り販り面會致度侍へハ自是御暇蒙り可申し逆鹿藏ハ介夜叔父道明寺ヲ旅宿万屋方へ引移れり然る尾州の小戸田會津の菅音川の長盛們自身入来而復讎を祝し各位本國へ鹿藏を伴侶んと礼を正し詞を竭し述べ見共鹿藏本國父母の對面致度旨を申立て辞退道明寺も詞を副て申見共尚再三使節を以て三家の老臣鹿藏一奉仕を勸むる山城助鹿藏を遣せし一向御断り申入逆把敢されハ早諍論の氣色見ハれ四家各位意地強く度せ不度と挑み是是七月十九日より絆糸り同廿五日の頃迄介絆して四家の使節奔走中然程一越前侯是等の風説を聴召坂井譽田を召て命見ハ頃日四家の老臣彼鹿藏の武勇を感而倚一は伴販人諍ふ由聴及べり予依之り良計を設けり介絆示々と曰ふ坂井大は感伏而早速



御指揮可有と申警田ハ深智の人成バ音黙と而聞被居大守ハ直に四家の旅館へ使節を立介旨意を述る様ハ頃日四家の内諍を聴処鹿藏一身の落着を被挑由以前の次第ハ右まき左まれ當般此方の領分にて離討仕課せ多年の志操を果せ処ハ則ち此方の情は侍ハみや殊に星名ハ俺方の藩臣成共忠孝を感ト之を許而浮田主従は令討上ハ鹿藏ハ他家へ相通典ぎ永く越前家へ召抱んと欲ふ此旨立販て國守へ申上りうる可と為云見ハ四家の衆中當惑而特標は是道明寺山城助ハ急ぎ準備而福井城府を夜に紛れ退くと成り城府の口々尾州會津音川の三家各位人數を出而鹿藏の販國を支んと依て山城助憤怒町憲司は此由を届けたり老臣譽田ハ之を聴日を過さバ此儀大夏に成人速に支を収めん者と征夷家の御檢使の両士は談して無事の計



ひを乞ふ松井大坪義諾して速見刑部を以て
 小戸田菅長盛道明寺浮田為十郎佐野鹿藏を
 召寄させ多良尾主膳の第に於て松井主水大
 坪新助衆々を廣式に集め征夷家の威勢を示
 して大坪高声に申見八各位奈何心得侍りや
 當般從武將御檢使を立被下ハ復讐者遂為耳
 成り前後の狼藉無うしめん為に各一國守の
 老臣と而總一個の鹿藏が躬に論うい當城府
 上下混雜惑乱も思ひ各武威に募て臂を張り
 鹿藏を度せ度きと挑りハ征夷家と對面
 無札の諍論成りや復讐相畢後ハ到り鹿藏の
 躬を挑る時ハ檢使の俺們社鑿司成バ假令何
 方家僕も有れ一旦大公儀へ卒出べき道理
 之然ど兩個に別々仔細有ねバ公儀差置成
 ぎや公理も分別なく各位俺等を申立條大公
 儀を重下さる仕方且此返答を羨いらんと
 問四家の老臣此詞に恐れ惶て誰か一個唇



を開的なる大坪再て被申様鹿藏の出生ハ肥
 後の田殊に父母存命の赴き聞ゆ親を棄置他
 國に在解是忠孝の道に欠べし速うは生國へ
 販るべき之を拒り強て召抱んと挑方ハ疑
 ふりくハ浪士を招き野心をさし秋の答め有
 ん俺們征夷家檢使成ハ之を嫌る人有バ為音
 上奈何々と詰り見よそ四家名称老臣も一
 言半句の答も無一同恐れ入奉ると述けり松
 井ハ道明寺に云様一統兼引の上ハ仔細有ま
 ト鹿藏を本國へ伴飯べし尙途中狼藉の的有
 ハ召捕止置て早速京都へ訴訟べしと有見ハ
 山城助有難と拝謝せり大坪ハ又四家老臣們
 へ退出勝手可為と被申見ハ今迄互は意地張
 合し面々大坪の智弁ハ威勢折け食旅宿へと
 引把り



○五拾二回 浮田佐野の両士本國に飯話
 然程に浮田為十郎ハ無事落着き速うハ更

出度
 秋樂と述ぐ

め鹿藏を同道して長盛藏人の旅宿に至り
 最早表向して飯國の上ハ主従の縁今日限り
 此方の暇差出侍ふ可一向後ハ某を兄弟とも
 思召生涯和親を希ひ侍ると実を述免ハ藏人
 も余液を惜み其許菊池家被飯とも以前の
 好意を思ひ音信通下給バ飲ぶ可一此方も消
 息して安否を訪んと云鹿藏も大に悦相
 有て長盛浮田は暇を乞て自夫小戸田首松浦
 を始め綿屋久兵衛青山正伯も暇乞して引
 分れ亦山城助鹿藏同道して譽田第に赴き段
 々の厚情を預るれを述て暇を告坂井多良尾
 速見の三家へも恩謝して暇を告翌日両士福
 井城府を出立而本國へ指て急ぎ免爰も亦尾
 川小戸田會津の音音川の長盛浮田等各位越
 前家へ始終厚情を礼謝而余本國に立飯り松
 浦青山綿屋們も皆と俱に啓行せり長盛藏人
 ハ浮田為十良を伴ひ飯國而直様登城成大守



松浦
 奥州

満元殿へ浮田主従の轉末逐一言上而朝日丸
 の室剣を差上免ハ大守殊の外御喜悅して藏
 人ら前下虚謀り為十郎を助命せし罪を許れ
 為十郎を被召て感賞在まし亡父の跡目相
 續本領安堵得ます可との命は為十郎ハ君恩
 骨身に徹へ數度拜礼して感涙を流而有難
 御請申上より大守御酒杯を下賜はり航て
 御暇賜り免ハ為十郎藏人へ厚く拜謝して倦
 第へ勇飯りて慈母乘戸始め一族の衆中に対
 面成互は無支を祝し民助鹿十郎の親介躬の
 一伍一什の長話を成しける復道明寺佐野
 の兩個も海陸無恙肥後八代に参着して早速
 大守へ飯國の赴き言上成て主君へ御目見
 上り越州の一伍一什を具し言上し速び免ハ
 武亂殿感悦有て大に鹿十郎を賞讃し給ふ鹿
 十郎も主君を拜礼成て俺躬の上の絆無事上
 申成バ大守愈々悦喜斜め不成嘸而親も懂り



數等成人疾下て對面仕れと叔父諸も御暇
 給ひ是兩個御請申て下城一佐野邸に飯り
 出羽助秋篠兄の主水も鹿十郎が左右に把
 携て嬉笑して黙止鹿十郎も涙流して姑く問
 答無りけるが漸次押拭ひ父母同胞と共に國
 達以後の話説き違ひける○菊地彦鹿十郎へ
 祿を賜ふ話 侍て鹿十郎八九箇年の間の話
 説を為し出羽助秋篠主水を始め一族の衆中
 も小武成を賞め或ハ駭き或ハ悲之夫の中
 彼松浦が女滋子の絆を父母聞て大に歎び之
 伴儀の良縁之主君へ願ひ取らんして道明寺
 にも商議成之之宜き絆と諾し是ハ其後香
 姻の願を大守へ言上るまよ速か御許容有
 て且鹿十郎へ一萬貫の祿を下賜する実は無
 類き面目を施したる今年の在國而明る應永
 十三年正月鹿十郎奥州松浦方へ赴く由を言
 上りて主君へ御暇願ひ賜ハ百日の暇賜り



ぬ依而猛可ま準備而從者數人召卒き十四日
 八代を啓行して阿州浮田の第を訪ひ傳五
 右衛門後室葉戸内室於菊對面して互に遇
 一話説を成又長盛の邸にも到り一日滯留而
 此地を去り東國へ急ぎ途中前々懇切を受
 家を訪て介恩を謝し亦生の上旬奥州會津松
 浦山左衛門が宅に着て別後の情を述去年加
 勢の札を厚謝し然て當般父母の許を受け滋
 子を娶らん絆を述る山左衛門巻絹滋子も大
 一喜悅び猛可も介準備を成鹿十郎ハ若名
 殿へ拜謁し將首の邸に至て去年の札謝せり
 爰に大守佐野松浦が誓姻の絆を聞召し菅清
 左衛門を媒人し命ト給ひ鹿十郎滋子誓札首
 尾全く整ひ松浦一家の歡び一方不成鹿十郎
 二十日計滯留して松浦夫婦は暇を告滋子並
 び男女十人の差添人し從者召卒四月
 の上旬會津を出立同月下旬肥後八代に飯り



着き主君を拝謁して良辰を撰り更ニ式杯して親子夫婦睦教暮ぬ鹿十郎へ大守邸を一箇所賜り御表御用人役を命じ給ひ是ハ愈々忠誠を尽し佐野の兩家俱ニ栄て子孫綿續たり

繪本佐野報義録第七編大尾

明治十八年三月七日 翻刻御届
同 十九年九月廿八日 成

定價金十八錢

編輯人

原版人

翻刻人

故人

知足館

大阪府平民村

鹿田源藏

東區安土町三丁目廿番地ノ内宅番戸

賣捌人

星野熊吉
木村仁王堂

大賣捌
書肆問屋

赤志忠七	同志社	松田與助
梅原龜七	兔屋支店	東京屋
森本太助	駿々堂	繪艸紙問屋

三府賣捌書肆問屋

大阪	柳原喜兵衛	濱本伊三郎	東京	北畠茂兵衛
同	松村九兵衛	前川宗七	同	稲田佐兵衛
同	前川善兵衛	岡本專助	同	山中市兵衛
同	吉岡平助	野村長兵衛	同	岸田吟香
同	岡田茂兵衛	大村安兵衛	同	江島喜兵衛
同	田中太右衛門	青木恒三郎	同	兔屋本店
同	中川勘助	中島徳兵衛	同	春陽堂
同	花井卯助	金尾為七	同	加藤正七
同	書籍會社	森本專助	同	杉本甚助
同	三木佐助	小谷卯八郎	同	福井源次郎
同	辻本秀五郎	湯川孫兵衛	同	大谷仁兵衛
同	岡島真七	豊住幾之助	同	川勝徳次郎
同	鹿田静七	和田庄藏	同	竹岡文助
同	此村庄助	小山龜松	同	藤井佐兵衛
同	此村彦助	梅原市松	同	内藤彦一
同	北尾禹三郎	勝間次郎	同	田中治兵衛

